

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 田中(小倉)真理子

学位：文学修士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
日本文学	日本文学 日本語教育	
主要担当授業科目	日本文学 日本語表現法 ビジネス表現トレーニング プレゼンテーション論 プレゼンテーション演習(初級) プレゼンテーション演習(中級) プレゼンテーション演習(上級) 基礎演習Ⅰ 基礎演習Ⅱ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1) 「話し方教室」の計画と実施	平成9年12月 平成10年12月 平成11年10月 平成12年12月	東京成徳短期大学言語文化コミュニケーション科では、話し言葉を充実させる目的から「国語表現の技術」の授業の一環として「話し方教室」を行った。平成9年以降12年まで、その計画と実施を担当した。平成9年は、樋口一葉の作品の朗読に異彩を放つ幸田弘子氏、平成10年、11年は元NHKアナウンサーの野崎康夫氏、平成12年は東京言葉やアクセントについて造詣の深い秋永一枝氏を講師に招き実施した。
2) プレゼンテーション能力育成のための教育法研究(私立大学教育研究高度化推進特別補助 採択)	平成17年 平成18年 平成19年	東京成徳短期大学ビジネス心理科においては、プレゼンテーション論、プレゼンテーション演習A、日本語表現法、ビジネス表現トレーニングなど、プレゼンテーション能力育成のための教育法の開発に加え、プレゼンテーション実務士資格所得のためのカリキュラムの充実と、卒業研究時に行うプレゼンテーションの充実を目的とした教育研究を実施した。特に、卒業研究では、メディアサイト・ライブという映像提示装置を使用し、プレゼンテーションの振り返りと記録に利用した。 (共同研究者 プレゼンテーション研究グループ：小倉真理子、松坂・宜、松井陽通、野口禎一郎、浅岡由美 宮澤俊憲 池田善英 富田真紀子)
2 作成した教科書、教材 1) 『国語表現法－効果的に書くには－』	昭和63年5月	共著者：橋川俊樹、藤田洋治、斎藤博、江口孝夫、木村秀次、 <u>田中真理子</u> 東京成徳短期大学「国語表現法」の教材として左のテキストを作成した。五編からなり、「第一編 課題文を書くには」「第二編 他人に伝えるには」「第三編 レポートを書くには」「第四編 論文に進むには」「第五編 文学の表現とは」に分かれる。主に第五編を担当し、文学作品で使われている表現方法について解説した。
2) 『国語表現の技術』	平成8年3月	共著者：岡本豊、山下琢己、藤田洋治、武井絹江、 <u>田中真理子</u> 、杉浦晋、宮武利江、和田康一郎、桑原英子、小林朋恵、青柳隆、若林力 東京成徳短期大学「国語表現の技術」の教材として左のテキストを作成した。日本語での表現方法をより具体的に示すことを目指し、「第一編 表現入門」「第二編 よりよく伝えるために」「第三編 論理的表現」のほか、具体例を充実させた[付録編]を掲載した。主に[付録編]中の「六、手紙・葉書の書き方と文例」を担当し、実際に手紙文を書く上での手引きとして活用できるように工夫した。

3) 『金子みすゞの世界』	平成 14 年 7 月	共著者：小倉真理子 大国真希 柿木原くみ 上宇都ゆり ほ 岸睦子 熊谷信子 児玉貴恵子 小林和子 種田瑞子 花崎育代 早野喜久江 布施薫 真有澄香 溝部優実子 和田季江 詩人金子みすゞをキーワードに視点を置いて、その詩の背景にあるみすゞの心情を読み解くことを目指した分析を行った。注目されるべき詩を大きく掲げることによって、みすゞを学ぶに当たっての入門書としての役割を果たしている。		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		特になし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし		
5 その他		特になし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概要		
1 資格、免許 1) 文学士の資格取得 2) 高等学校教諭二級普通免許状（国語） 3) 文学修士の資格取得	昭和 56 年 3 月 昭和 56 年 3 月 昭和 58 年 3 月	(二第 730 号) (国語、昭 55 高二普第 923 号) (修乙第 435 号)		
2 特許等		特になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし		
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1) 和歌文学大系第 27 卷『別離一路』	共著	平成 12 年 12 月	明治書院	共著者：小倉真理子、上田博 (全体概要；全 342 頁) 和歌文学大系は上代から近代までの代表的な歌集について注釈を施し、さらに適切な注解を加えて鑑賞のポイントを説明している。 (担当部分概要) p 229～321。全 30 巻中第 27 巻で取り上げられている若山牧水『別離』と木下利玄『一路』のうち、『一路』の注釈および解説を担当した。

2) 『金子みすゞ 花と海と空の詩』	共著	平成 15 年 2 月	勉誠出版	<p>共著者：馬渡憲三郎 植賀七代 岸睦子 有山大五 真有澄香 早野喜久江 杉山欣也 安田義明 上宇都ゆりほ 熊谷信子 石内徹 中沢弥 小倉真理子 宮本一宏 木村慧子 吉田生緒 富盛菊枝 勝原晴希 志村有宏</p> <p>(全体概要；全 292 頁) 執筆者それぞれが金子みすゞの詩を花・海・空に視点を置いて論じた。また、金子みすゞと同時代の文人たちとの比較研究も収録してある。</p> <p>(担当部分概要) p 204～216 みすゞの代表作「私と小鳥と鈴と」は、「みんなちがって、みんないい」という表現によって締め括られている。この表現が際立って優れているために、詩の前半の読みが疎かにされてきた嫌いがある。本稿ではその点から読み直して、この詩の中に作者の深い苦悩があることを読み解いた。</p>
3) 日本の作家 100 人 斎藤茂吉	単著	平成 17 年 5 月	勉誠出版	<p>(全体概要；全 211 頁) 斎藤茂吉は、数え 15 歳の時、山形県上山から親戚筋の斎藤紀一の元に上京して、開成中学から東京帝国大学医科大学へと進学を果たした。また、紀一の次女輝子との養子縁組もなされ、当時日本一の私立病院と言われた青山脳病院の院長となった。その一方で、歌人としてアララギ派の中核で活躍し、その功績から、学士院賞、文化勲章などの榮譽に浴することができた。このような一生のあゆみとともに、茂吉が残した作品を鑑賞していく。そして、茂吉の心の中に生き続ける孤独と純心が歌となって結晶されている美しさを読み取った。</p>
4) コレクション日本歌人選 018 斎藤茂吉	単著	平成 23 年 2 月	笠間書院	<p>(全体概要；全 125 頁) 日本の歌の歴史に大きな足跡を残した代表的歌人の秀歌を、堪能できるように編んだ初めてのアンソロジー、全 60 冊の内の 1 つ。東北山形から出て、他の追隨を許さぬ足跡を戦後まで残したアララギ派最大の歌人、斎藤茂吉の歌の中から 48 首を鑑賞する。秀歌を鑑賞しながら、茂吉の人生を辿ることができるように構成した。他に、歌人略伝、解説、読書案内などを掲載する。</p>
(学術論文)				
1) 木下利玄における農耕の歌—『紅玉』から『一路』へ	単著	平成 13 年 4 月	「文学研究」VOL. 89 P 1～11	<p>明星派の北原白秋、アララギ派の斎藤茂吉、白樺派の木下利玄の歌に、極めて類似性の高い歌ものがあることを指摘しながら、利玄が独自の歌境を獲得していく過程を明らかにした。なお、これを論ずるに当たっては、典型的に利玄の歌の展開が読み取れる「晩帰」「大根畑」「大霜」など、農耕の歌を中心とした。</p>

2) 茂吉と白秋－初期歌集における編纂方法について－	単著	平成 16 年 11 月	「國學院雑誌」第 105 巻第 11 号 P543～556	近代詩歌を代表する斎藤茂吉と北原白秋の間で、制作上の深い交流があったことはよく知られている。ただ、今まで論じられてきたのは、もっぱら個々の歌を比較した場合であった。しかし、両者の交流はさらに多岐にわたっている。本論では、歌集の編纂方法という側面を取り上げ、両者の交流に関して論じた。歌集の編纂方法を検証することによって、個々の歌を見る以上にダイナミックな創作意図を見出すことを試みた。
3) 雑誌「日光」と木下利玄	単著	平成 19 年 3 月	「東京成徳短期大学紀要」第 40 号	近代短歌史に画期をなす雑誌として創刊された「日光」で特集されている木下利玄について論じた。まず、利玄が「日光」で特集された理由と考えられることについて述べた。続いて、「日光」創刊の経緯を辿りながら、「日光」と利玄の関係を追求した。これによって、「日光」において利玄が求められていた歌人像と、実際の利玄の作歌活動に齟齬があることがわかった。利玄は、「日光」が目指す短歌の形を具現する一方で、「日光」が敵対する「アララギ」の歌風に強く傾いていたのである。
4) 「プレゼンテーション能力育成のための教育法研究」報告－卒業研究とプレゼンテーション教育をリンクさせる試み－	単著	平成 20 年 3 月	「東京成徳短期大学紀要」第 41 号 P39-51	現在、模索状態であるといわれているプレゼンテーション教育の現状を概観した上で、東京成徳短期大学ビジネス心理科におけるプレゼンテーション教育の方法を公表し、文部科学省より採択された「プレゼンテーション能力育成のための教育法研究」（私立大学教育研究高度化推進特別補助）の報告とする。 （共同研究者：小倉真理子、松坂たかよし、松井陽通、野口禎一郎、浅岡由美、宮澤俊憲、池田善英、富田真紀子）
5) 牧水における歌集の編纂方法～「白鳥」の歌を視点として～	単著	平成 24 年 2 月	「朝霧」第 60 巻 2 号 P14-17	若山牧水の第一歌集『海の声』は編集が未熟であるという理由から顧みられることが少なかった。そこで、牧水の代表歌「白鳥は哀しからずや」の歌集中における配列を検討しながら、『海の声』の編集方法を明らかにする端緒を見出した。
6) 歌集『海の声』の編纂方法	単著	平成 24 年 3 月	「経営論集」第 1 号 P1-11	前稿「牧水における歌集の編纂方法～『白鳥』の歌を視点として～」に加え、『海の声』全体の編纂に言及した。牧水第一歌集の『海の声』と第三歌集の『別離』とは、重複している掲載歌が多く、これまで『別離』の方が整理されているものと考えられてきた。が、『海の声』と『別離』とは明らかに異なる視点からの編集方針があることがわかった。『海の声』と『別離』とは其々に全く異なる歌集として、位置づけられる必要があるだろう。
7) 初版『赤光』の特異性	単著	平成 24 年 5 月	「短歌」第 59 巻 6 号 P106-107	雑誌「短歌」における、斎藤茂吉生誕 130 年の特集に掲載。 『初版 赤光』は茂吉の代表歌集であるばかりでなく、アララギ派の代表作としても注目されている。ここでは、新しい歌を冒頭に置き、次第に古い歌へと遡るような編

				集方法をとっている。アララギ派の歌集の中で、こうした編集は大変珍しい。実際、茂吉がこうした方法で歌集を編集したのは、この『赤光』ただ一つである。この時期、茂吉はなぜこのような方法で歌集を編纂したのか。同時代の他派歌人も視野に入れつつ考察した。
(その他)				
1) 木下利玄『一路』の時代性－牡丹花の歌を中心として－	単著	平成 11 年 12 月	平成 11 年度和歌文学会 12 月例会発表	利玄の第三歌集『一路』の冒頭にある連作で、アララギ的な用語が意識的に使用されているのを確認する一方、代表作である「牡丹花」連作においては、用語の使用というレベルではなく、歌を詠むときの目の付け所、物事を見る観点という根本的な点でアララギの方法を学んでいることを明らかにした。
2) 梶木剛著『抒情の行程』書評	単著	平成 12 年 4 月	「文学研究」AOL. 88	平成 11 年 8 月、短歌新聞社より刊行された梶木剛『抒情の行程』《B 6 判・354 ページ》について評した。当該の書で触れられているのは、斎藤茂吉、土屋文明、佐藤佐太郎、島木赤彦の四名、いずれもアララギ関係の歌人たちである。
3) 西郷信綱著『斎藤茂吉』書評	単著	平成 15 年 5 月	「日本文学」VOL. 52 P 80～81	平成 14 年 10 月、朝日新聞社より刊行された『斎藤茂吉』(295 頁・2500 円) について評した。西郷氏の論ずる『斎藤茂吉』は、西郷氏の世界と深く関わっている。その点が当該書の魅力となっている。ただし、戦後 60 年を経た現在、戦争を詠んだ茂吉の歌等も、より客観的に総合的にとらえるべき時期に達しているのではないかという意見を述べた。
4) 金子みすゞの不思議な世界	単著	平成 16 年 2 月	平成 16 年日本詩人クラブ 2 月例会発表	金子みすゞの生涯と詩作の関係を明らかにしながら、みすゞの孤独と寂しさについて述べた。また、困難と退治する強い意志についても言及した。さらに、同時代の詩人である北原白秋と比較することによって、みすゞ文学の独自性を明らかにした。